歴史地理学　56－3（270）1-22　2014. 6

古代朝鮮における地方都市の立地と都市プランに関する再検討

―新羅溟州治所を事例に―

轟　　博　志

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．溟州（江陵）地域の概観
　(1) 地理・歴史的概要
　(2) 古代城郭遺跡の分布と現況
Ⅲ．濊国古城の再比定
　(1) 地図資料による城郭復原の再検討
　(2) 城郭と方格地割の関係性
Ⅳ．濊国古城の性格と溟州治所
　(1) 濊国古城の立地と築城時期
　(2) 溟州治所の立地と変遷
Ⅴ．むすび

Ⅰ．はじめに

新羅の地方都市に関する歴史地理学的研究は，地理学者の手によるものは皆無に近い。歴史地理学的な分析は，考古学や文献史学者による研究の中で部分的に援用され，結果として若干の地理的知見が補完されている。それらを含めても，地方都市の中でも郡県治所の所在地に関する研究はほとんどなく，多くは州や小京といった，広域拠点都市に関する研究であった。それも政治・社会史的な研究が中心で，都市の立地や内部構造に関するものとなると以下のように，非常に限られてくる。

地理学者でもあった藤田元春[1]は，平壌における箕子井田[2]に関する議論を敷衍する形で，新羅の王京[3]及び地方都市における方一町単位の地割の存在に関して言及した。それらは忠州・尚州・清州・南原などの九州五小京[4]にあたる都市であること，地割の尺度は唐里に従った可能性があることなどを明らかにした。管見の限り，藤田が新羅地方都市の構造に関する研究の嚆矢と思われる。

続く藤田亮策[5]は考古学者であるが，州治の移動や国土統治機構の均等分布といった歴史地理学的な視点からも，九州五小京の立地過程を検証した。そして，新羅の地方行政区画がそれ以前の部族国家の領域を基準に成立し，その影響は近世や現代の行政区画にまで及んだことと，九州と五小京の並立は新羅の急速かつ偏心的な領土拡張という特殊状況下の産物であることを指摘した。ただし，あくまでマクロスケールでの考察であり，都市の微視的な立地環境や内部構造を論じたものではない。

一方，朴泰祐[6]は初めて本格的なミクロスケールの実証研究を行い，九州五小京を①市街地の痕跡が残る都市，②羅城の痕跡が残る都市，③包谷式または山頂式山城が付随する都市に分類した。また一部で地形図や地籍図を利用して，①の類型において方格型の都市プランを復原し，各坊の大きさが160m×

キーワード：新羅，江陵，溟州，濊国古城，方格地割

160mであるとし，藤田元春の仮説を，一部の都市で実証した。ただし詳細な検討は一部の都市に留まり，上記の類型化や治所の立地比定など多くの結果は，後発研究によって否定・修正された。

山田隆文[7]は朴が①に分類しなかった都市を含め，九州五小京全てに方格地割の存在を想定し，日本統治期の1万分の1地形図の読図と考古資料などから図上復原を試みた。しかし地籍図による一筆単位の分析は行わず，一部都市のみ現地調査を行い，また羅城の存在を捨象するなど，朴泰祐と同様に景観復原の作業としては不完全である。例えば九州の一つである溟州治所[8]の都市プランに関しても，古文献にも現れる羅城や周辺地形との関係が考慮されておらず，そもそも羅城址を「確認できない」とするなど，地形図レベルの基礎調査に留まっている。

その溟州治所は，近年の都心再開発に伴って考古学的調査の事例が増加したこともあり，尚州[9]と並んで治所の立地や都市構造など，地理的な側面を併せ持つ古代研究が進行している都市である。地理学者の研究としては李俊善[10]による江陵地域古代山城に関する研究があるが，都市研究ではなく，江陵邑城や濊国古城などの平地城は含まれない。考古学者の洪永鎬[11]は平地城も含め，溟州における城郭やその他の考古資料を手掛かりとして，新羅の地域支配の実態を明らかにした。その結果新羅の支配は東海岸砂丘から，漸進的に内陸部に浸透したことが明らかになった。

溟州治所そのものの研究としては金興術[12]が最初であり，古代から中世にかけての溟州及び江陵治所の立地を，濊国古城期，溟州城期，江陵邑城期の三期に分け，都市の持つ性格及び対外関係の変化が都市立地の変化を誘発したとした。また地籍図を使用して城郭の復原を試みたが，第Ⅲ章で検証するように検討が不十分であり，特に濊国古城に関しては遺存地割や城の地目を無視した復原がなされている（図6参照）。

李相洙[13]も，さらには江陵市役所の公式見解[14]も，金の示した不完全な濊国古城復原図をほぼ踏襲しており，このまま発掘調査に入ることは憂慮される。

また李は治所の移動に関しても金と似た主張をしているが，溟州城期への移行時期を金よりも1世紀早い，7世紀の靺鞨族侵入期に求めている点，濊国古城期以前に江門洞土城期の存在を指摘した点が異なる。また両者とも濊国古城が実際に濊国によって築造されたと断言している。これに対しては考古学界でも異論があり，例えば沈賢容[15]は，李の主張に反論して濊国古城は新羅の手によるものとしている。

先行研究の具体的な主張も含め，詳細な検討は第Ⅲ章以降で行うが，以上の溟州治所を巡る先行研究の問題点を整理すると，①濊国古城にみられる正確さを欠いた図上復原と，②上記のように都合4か所が提示された治所の，立地移動時期や段階が研究者によってまちまちであることの2点に要約されよう。双方とも歴史地理学的手法と視座の不在が要因の一つとなっていると考えられ，特に濊国古城に関して，羅城を始めとした空間構造や築城時期が正確に解明されていないことが，問題を複雑にしている。

そこで本稿では，歴史地理学的な手法を用い，新羅時代の溟州治所を事例として①江門洞土城，濊国古城，溟州山城，江陵邑城など，溟州治所に比定されてきた都市城郭のうち，特に復原が不正確と考えられる濊国古城及び城内街路構造の比定を再度試み，②その結果と先行研究，さらに関連史料を使って，濊国古城を含む新羅統治下における溟州治所の立地変遷を再検討することを，研究目的とする。

また以上で得られた知見を用い，立地復原が不十分な他の九州五小京に適用可能かどう

かについても，一定の仮説を得ようとする。つまり本研究は，考古学的知見と先行研究が比較的豊富な溟州治所を切り口として，今後進めるべき新羅の地方都市における立地復原研究の端緒を提供する。

九州五小京のうち溟州のほか尚州も事例として同様の条件を備えているが，邑城の本格的な発掘調査がまだ行われていないので，本研究の事例としては選択しなかった。尚州はむしろ本研究の成果を最初に適用すべき事例と考えている。

研究の空間的範囲は，溟州治所所在地に比定される現在の大韓民国江原道江陵市市街地及び郊外とし（図１），時間的範囲は原則として新羅時代，特に溟州への関与を始めた５世紀から，新羅が滅亡する10世紀までに限定する。なお，溟州の地名が生まれたのは757年のことであり，それまでは第Ⅱ章で概説するような様々な呼称があったが，混乱を避けるために，本稿では原則として溟州に統一する。ただ溟州は東海岸地域全体を指す広域行政区域名でもあるため，州都としての溟州を示すときは溟州治所とし，また現江陵市域を示そうとするときは，江陵の名も併用する。さらに濊国古城や溟州山城にも複数の別称があるが，本稿では文化財行政において一般的に使用されるこれらの呼称をそのまま使った。

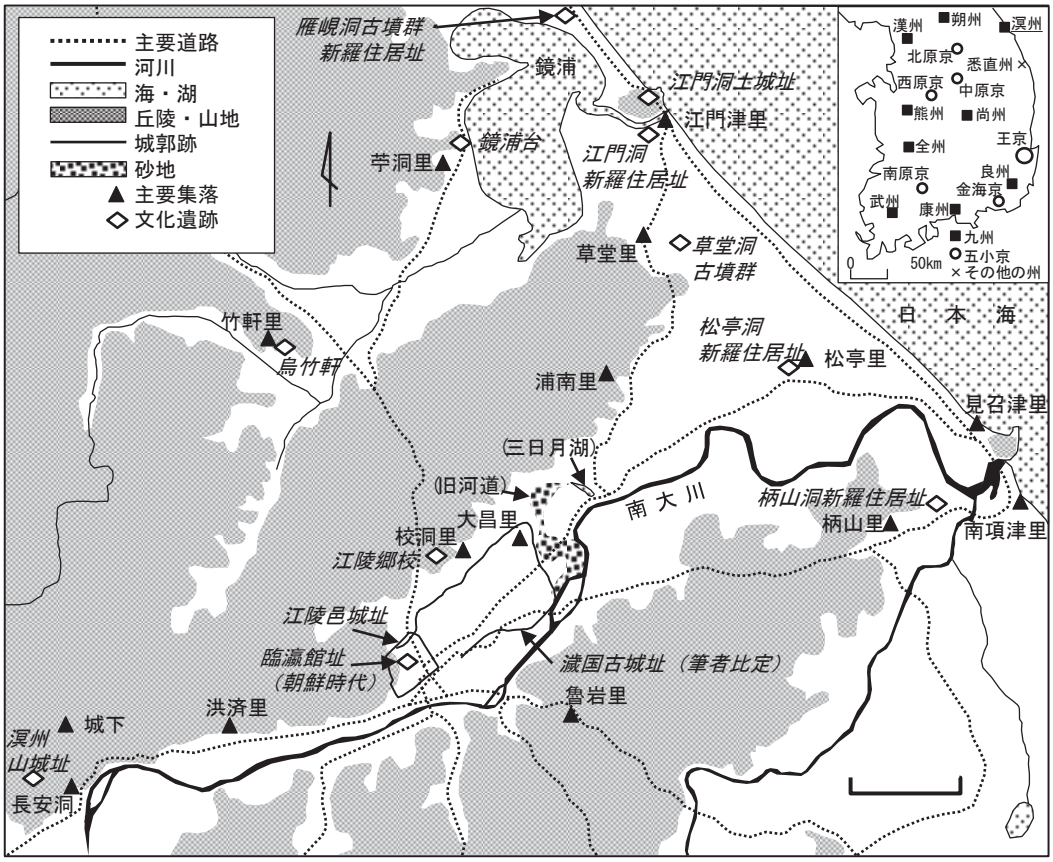

図１　江陵（新羅時代の溟州）主要部の概観と文化遺跡の分布

1915年陸地測量部測図の５万分の１地形図「江陵」を基図として筆者作成。1915年の状況を基準とし，それ以前に存在したものは「址」の字を加えた。また江陵中心部の文化遺跡の一部は省略し，代わりに図６に明示した。

使用した史料は『三国史記』『三国遺事』『後漢書』などの正史類，『新増東国輿地勝覧』『輿地図書』などの地理誌や古地図，近代の地形図や地籍図などである。また先行研究の成果や考古学的な調査報告書類は，学説整理の根拠とするとともに，資料としても活用した。

Ⅱ．溟州（江陵）地域の概観

(1) 地理・歴史的概要

江原道は朝鮮半島の脊梁山脈である太白山脈[16]により東西に分けられ，その西側を嶺西地方，東側を嶺東地方と呼ぶ。嶺東地方は太白山脈と日本海に挟まれた南北に細長い領域で，800ｍないし1,700ｍ級の峻険な稜線に阻まれた嶺西地方より，海路も活用できる南北方向の交流の方が盛んになりやすい地勢である。地域随一の沖積平野が発達した江陵は，歴史的にも現在においても嶺東の中心地である。

新羅による征服以前の江陵地域には，濊と呼ばれる民族が居住していた。濊国古城の名はこのことに由来する。ここを拠点とした濊は東濊とも呼ばれ，紀元前に中国東北部にいた濊族のうち，江原道地方に移住した分派の後裔であるとされる。その版図は朝鮮半島東海岸一帯に，日本海と太白山脈に挟まれる形で南北に長く分布した。中国の史書においては，箕子朝鮮侯準の時代に王号を自称し，国としての体裁が整っていたとされるが，一方で「大君長」がおらず，多くの部族国家の集合体であったとも書かれている[17]。武帝の時代に前漢に併合され，楽浪郡などを通じて直接・間接的な支配を受けたが，後漢末期には高句麗の支配を受けるようになり，溟州地域は「河西良」または「何瑟羅」と呼ばれるようになった。

慶州盆地を中心とした新羅が，東海岸伝いに溟州地域に向け北進を始めたのは，この後のことである。397（奈勿尼師今42）年には，「何瑟羅で旱魃が起きて百姓が飢えたので，罪人を釈放し，1年間税を免除した」[18]という記録があることから，この時期までに少なくとも溟州治所周辺の一部において，根拠地が設けられたと考えられる。考古資料からみても，江門洞など江陵の海岸砂丘地域の遺跡より，4世紀第4四半期内のものとされる土器などが出土していることから[19]，この記録はほぼ間違いないとみられる。

450（訥祇麻立干34）年には高句麗の将が悉直原[20]で狩猟をしていた時，何瑟羅城主の三直（人名）に殺害される事件が起こった。この時期，新羅は何瑟羅一帯を支配しつつも，北方勢力との関係が不安定で，辺境としての性格が濃かったと考えられる。505（智証麻立干6）年に王族の異斯夫が悉直州の軍主[21]に任命され，さらに512（同13）年に何瑟羅に軍主を置いた時に，やはり異斯夫が任命された[22]。軍主は軍事を司るとともに地方広域行政の責任者であったので，異斯夫の任地の移動は州治の移動と時を同じくしていたとみるべきで[23]，したがって512年は何瑟羅が新羅の東海岸統治の中心地としての地位を，名実ともに固めた年とみてよかろう。

その後新羅のさらなる北進により州治の立地も北上したが，何瑟羅の交通の拠点としての地位は変わらず，639（善徳王8）年には北小京が置かれた[24]。その後「靺鞨とつながっており，人心が不安定であるため[25]」，658（武烈王5）年に北小京は廃止され，その後には河西州が置かれた。河西州は新羅の三国統一後にそのまま新羅九州の一つとなり，再び東海岸地方全体の行政中心地となった。757（景徳王16）年には漢化政策の一環として溟州と改名された[26]。

786（元聖王2）年，王族の金周元が溟州郡王に封ぜられたのち[27]，江陵金氏一族による半独立国的な統治が行われ，「溟州郡国」とも呼ばれた[28]。以上のように，新羅時代の江陵及び東海岸地域は，①土着勢力の征服，

②地域統治の中心地化，③小京設置を通じた新羅化，④半独立領域化と，四つの時期区分に大別される。こうした区分は，そのまま統一新羅の他の占領地域にも当てはまる場合が多い。

高麗王朝初期には東原京が設置され，それ以後高麗・朝鮮王朝時代を通じて，大都護府として嶺東の行政・軍事の中心であり続けた。江陵の名の初出は高麗時代の1263年のことで[29]，江原道の名もここと原州に由来する。日本統治期には江原道の道庁は春川に置かれたが，江陵は嶺東地方の中心地として，各種官公署や学校などが立地した。その関係で都市化が早くから進展し，濊国古城や高麗時代に由来する江陵邑城の城壁が徐々に撤去された。

(2) 古代城郭遺跡の分布と現況

江陵地域の城郭や古墳などの遺跡調査は1912年に初めて行われ[30]，近年に至って市街地の再開発や歴史公園の造成などに伴う発掘調査で，新羅の江陵地域進出の時間的・空間的様相が次第に明らかになりつつある。

既存の研究で溟州治所に比定される江陵周辺の城郭は，以下の四つである（図１参照）。

江陵邑城は高麗王朝期の築造と考えられ，複数の改修を経て最終的には全周3,782尺の囲郭城となった。高麗及び朝鮮王朝を通じて官衙の所在地であり，日本統治期にもそのまま江陵郡庁（のちに市役所）が立地した。都市化により城壁はほとんどの区間で撤去され，旧東門付近などごく一部の遺構のみ露出している。江陵邑城は菱形をしており，東門は実際には北東を向いており，その壁は東壁というより北東壁である。これは他の門と壁の関係も同様であり，また江陵邑城と連続して立地する濊国古城も同様である。本稿では門の名称との整合性を図るため，実際の方角とは異なるが北東壁を東壁，南西壁を西壁のように置き換えて示す。

二つ目の濊国古城は邑城の東にあったとされる土城で，周囲3,484尺の平地城であった。日本統治期まで一部が残存していたが（図２），1962年の江陵駅開業を前後した都市化の進展で破壊が進み，ほぼ消滅した。江陵邑城と同様，菱形をしていたと考えられる。現在のところ，全く考古学的調査は着手されていない。ただし，濊国古城の東壁の撤去跡の一部は，そのままの形で宅地となったので，現在でも辿ることができるなど，全く痕跡をとどめていないわけではない（図３）。

三つ目の溟州山城は邑城の西へ直線距離で約３kmほど，東海高速国道の江陵インター

図２　1912年の調査当時残存していた濊国古城の羅城

朝鮮総督府編『朝鮮古跡図譜（三）』朝鮮総督府，1920，国立国会図書館近代デジタルライブラリーより。

図３　濊国古城の東壁を撤去した跡に立ち並ぶ住宅（左）

路地は羅城の外側に当たる（2013年８月筆者撮影）。

チェンジに隣接した場所にある，包谷式の山城である。朝鮮王朝時代までの地理誌には修築の記録があるのみで規模は記されていないが，関東大学校博物館の実測によると，周囲は1,624ｍである[31]。まだ地表調査のみしかなされておらず，どの時期の築造かは正確にわかっていない。

最後に，東海岸と鏡浦の間の陸繋島（竹島峰）にある江門洞土城は，2012年にリゾート開発に伴って発掘されたばかりの小規模な城郭である。５～６世紀の築造と，新羅の遺跡としては最も古い年代に属することがわかっている[32]。江門洞土城の周辺には，当時のものと思われる古墳群や新羅系の住居跡が分布している。また海岸砂丘後背の丘陵地帯や湿地帯には，草堂洞古墳群に代表される６～７世紀のものと推定される古墳群や住居跡がある[33]。

Ⅲ．濊国古城の再比定

(1) 地図資料による城郭復原の再検討

第Ⅰ章で概観したように，濊国古城に関してはいくつかの史料があり，また実際に位置比定や図上復原を試みた論文や調査報告もある。ここではまず先行研究の主張を詳しく検討する。先述のように，金興術は日本統治期の地籍図を利用して，「城」の地目を手掛かりに濊国古城の図上復原を試みた[34]。それは日本統治期の行政区分上の玉川町内に収まる，ほぼ正円形に近い形になっている。西壁は城壁が嶺東線鉄道の盛り土にそのまま転用されたとしている。北壁はやはり鉄道の江陵駅構内及び駅前広場になったとする。李相洙もほぼ同様の見解を示し，復原図も金興術のものをそのまま論文に使用している[35]。

しかしながら，その復原図は地籍図に残る「城」地目の半分近くを捨象したり，そもそも筆界を無視するなど，遺存地割から古景観を割り出すという，歴史地理的景観復原の基本を欠くもので，根拠の希薄な推測の域を出ていない。さらに，江陵市役所の「遺跡管理システム」に登録されている濊国古城の復原図や文化財調査報告書類も，金の復原図をほぼ踏襲している。つまり，誤りの可能性が高い復原図がそのまま文化財行政当局の公式見解になってしまっている。歴史地理学的な面からの検討の欠如が，濊国古城に関する学術面のみならず，行政面のプロセスも誤らせている。現状では地籍図を基にした城郭の復原はなされていないも同然であり，今後発掘調査や遺跡の整備などが行われる前に，白紙からの再作業が必要となる。

実は濊国古城とされる城郭を地形図上に描いた資料が存在する。それは『朝鮮古跡図譜（三）』[36] に掲載された地形図上の「伝濊国古城」と記された城郭で，明らかに金や李の復原図面とは形態も規模も異なり，さらに朝鮮王朝時代の江陵邑城と一体化した形で描かれている（図４）。理解に苦しむのは，李相洙は自らの論文にこの図を参考資料として引用しながらも，復原図は金興術のものをそのまま採用している点だ。結果として『朝鮮古跡図譜（三）』に描かれた濊国古城の形態は，管見の限り濊国古城を復原しようとする全ての研究において活かされなかった。

筆者は改めて地籍原図[37] を用い，城郭の痕跡を再調査した。その結果，図５のように金や李の推定図と異なる位置で，さらに多くの連続する「城」地目を検出した。さらに「城」地目が途切れている部分でも，多くの地点で「城」地目と連続する遺存地割を検出した。菱形というより東西が長い長方形であり，城壁は直線ではなくかなり不規則な曲線を伴う区間が多い。それらをつなぎ合わせると，『朝鮮古跡図譜（三）』に描かれた「伝濊国古城」の形態とほぼ一致することがわかった。恐らく『朝鮮古跡図譜（三）』の編纂時はまだ城郭が残存していたので，それを手がかりに全体を地形図上に描いたのであろう。

また，史料に示された羅城の長さの比較

図４　『朝鮮古跡図譜（三）』掲載の「伝濊国古城」

国立国会図書館近代デジタルライブラリーより。江陵邑城と一体化して描かれている。

（表１）からも，この推定を補強できる。朝鮮時代に石築に改修された江陵邑城は『新増東国輿地勝覧』によれば3,782尺で，濊国古城の3,484尺と大差ない。ただ，これらが各羅城の全周とすると，濊国古城の方が若干小さいことになってしまい，図上復原とは相容れない。ただし地籍原図上に残存する羅城同士で比較すると，ほぼ正確な比率になる 。つまり，地理誌に記された濊国古城は全体の羅城ではなく，朝鮮時代に残存した区間を示したものなのであろう[38]。

ところで，本稿で引用した江陵邑城の調査報告は，全て１尺＝30cmちょうどで計算している。これは朝鮮の世宗代（1418～1450年）に度量衡を統一した際の営造尺（１尺＝約31.22cm）を単純化した数値と考えられる。ところが，江陵邑城の全周は『新増東国輿地勝覧』の値で1,180.74mであるのに，実際の江陵邑城の全周は地籍図による計測で約1,690mと大きな乖離があり，一尺は44.68cmになってしまう。これは土地の測量に使われる同じく世宗代の一等田尺（１尺＝約46.63cm）にむしろ近く，『新増東国輿地勝覧』の数値は一等田尺によるものである可能性を指摘しておく。朝鮮の使用尺に関する議論は簡単に結論が出るものではなく，本稿の目的でもないので，同じ尺度を用いたと思われる地理誌同士で，比較の手段としてのみ用いる。

地籍原図と『朝鮮古跡図譜（三）』双方の形態が一致したことで，この城郭が古文献に記録された濊国古城であることは，ほぼ間違いないと思われる。すると，これまでの考古学者や市役所において作成された濊国古城の復原図には，大きな誤りが含まれていたことになる[39]。

一方で西壁，つまり中世以降の江陵邑城の

図 5　濊国古城及び周辺の地割

1916年測図の朝鮮総督府臨時土地調査局作成千二百分の一地籍原図「江原道江陵郡郡内面玉川町外二町」「同校洞里」「同林町外四町」を基図とし、トレース及び加筆を施し作成。

内部に取り込まれている部分は，地籍原図でも遺存地割を断片的にしか確認できない。濊国古城の北壁から西壁に向かうカーブ（図５中の記号「A」）は，まるでそのまま江陵邑城の東壁の内側に食い込んで連続するかのような造りだが，その部分の地割は連続して検出されない。この理由として，いくつかの可能性が考えられる。

一つ目は，江陵邑城の築造により，他の部分よりかなり早期に西壁が消滅した可能性である。二つ目は，もともと江陵邑城が濊国古城の西側部分を構成していた可能性である。つまり江陵邑城の東壁が，城郭の領域を縮小する目的で追設されたか，もともと内郭の役割を果たしていたと考えられる。三つ目は江陵邑城の東壁がそのまま濊国古城の西壁を流

表 1　各地理誌における濊国古城及び江陵邑城に関する記述

地理誌名	作成年	濊国古城		江陵邑城	
		城名	規模・状況	城名	規模・状況
世宗実録地理志	1454	なし		邑土城	周回784歩
東国輿地勝覧	1481	獩国古城	在邑城東　土築 周3,484尺　今廃	邑城	土築 周2,108尺　高4尺 石築周139尺 高2尺
新増東国輿地勝覧	1532	獩国古城	在邑城東　土築 周3,484尺　今廃	邑城	土築 周2,108尺 高4尺 石築周139尺　高2尺 正徳壬申改築石築 周3,782尺　高9尺
輿地図書	1740	濊国古城	在邑城東　土築 周3,484尺　今廃	なし	
大東地志	1861	府東古城	周3484尺	邑城	中宗七年改築 周2,782[1] 尺有4門
江陵府志	1924	濊国古城	在邑城東　土築 周3,484尺　今廃而尚有基址	なし	
増修臨瀛誌	1933	濊国城	在官門東　土築 周回尺未詳　今廃[2]	邑城	土築 周2,108尺　高4尺 石築周一百　正徳壬申改築石築 周3,709尺

注1）『大東地志』の地方誌の部分は『東国輿地勝覧』からの引用が多いことから、ここの「2,782尺」は『新増東国輿地勝覧』の「3,782尺」の誤記と考えられる。
2）この他、溟州城について、金周元が受封し都としたとある。

用したと考える場合だが，上述のような両者の接続形態から，この可能性は希薄と思われる。

筆者は一つ目の説が最も可能性が高いと考える。なぜならば，図5のように地籍原図には江陵邑城の内部にも二か所「城」地目が存在し，特にその内の一か所は濊国古城の北壁と連続するような位置及び形態をしていることによる[40]。これらが濊国古城の城壁であったとすると，江陵邑城の領域の大部分が濊国古城と重複し，かつ両者はほとんど城壁を共有していなかった可能性が高い。各地理誌（表1）には江陵邑城が最初に築造された時期が明記されず，その後の修築の記事のみあるが，考古学的調査により，もととなる土城は遅くとも高麗（10～14世紀）末期に築造されたとされている[41]。

江陵邑城の築造によって，濊国古城のこの部分は他の区間より早期に撤去され，結果として地籍図にほとんど現れなくなったのではないか。多くの地理誌が「濊国古城址は江陵邑城の東側に在る[42]」とした。これは江陵邑城と重複した西側部分が早期に消滅し，東側部分のみ残存したため，その部分のみを指して「東側」としたと理解できる。先行研究はこれを「東側に離れてある」と誤解したのだ

ろう。

なお江陵邑城の位置は地形上，濊国古城の残りの領域より一段高い場所にある。したがって江陵邑城がほぼ濊国古城の領域内であったとしても，残りの領域と区別された空間，例えば官衙の領域ではなかったかと推測される。実際江陵邑城は高麗時代，朝鮮時代，さらに日本統治期に入っても官庁の所在地であった。そのため，高麗時代になって官衙領域のみ囲郭するように縮小再建されたものが江陵邑城である可能性もあろう。こうした縮小や移転による防衛機能の強化は，倭寇や女真族の来寇が度重なった時期に，東海岸の他の邑治でも記録されるものである[43]。

その点で，2005年まで行われた臨瀛館[44]を中心とする江陵官衙跡の発掘調査において，少なくとも高麗時代初期まで遡る，当時の東原京と推定される官衙建物の遺構が発見されている点は注目される[45]。東原京は高麗が後三国を統一する前に溟州に造営した小京であり，「東原京」の名から推測できるように，新羅の他の小京との同列性を強く意識した命名と言える[46]。官衙立地も，北小京のあった時期の新羅の溟州治所のそれを継承した可能性が考えられよう。

これらを併せ考えると濊国古城の領域は，地籍原図に残る羅城及びそれに準ずる遺存地割に沿った部分に，江陵邑城の領域の大部分を合わせた範囲となろう（図６）。

(2) 城郭と方格地割の関係性

次に，濊国古城の内部構造について検討する。まず注目すべきは，図５で明らかなように濊国古城の領域のほとんどで方格地割の痕跡がみえることだ。方格地割の存在は，山田も1933年測量の１万分の１地形図を根拠に言及している。その上で，これが統一新羅時代のものである可能性が高いとしている。溟州治所にかかわる方格地割に関して指摘した先行研究は，これが唯一である。ただ，山田は地籍図を検討しておらず，１万分の１地形図にはほとんど現れない羅城の存在については言及していない。また方格地割の推定範囲が河川や山地などに大きく食い込んでいる。

逆に金興術や李相洙は羅城のみに着目し，方格地割に関しては一切触れていない。したがって，羅城と方格地割を同時に取り上げ，相互の関係について検討した先行研究は存在しない。

図５には羅城内における地籍原図の筆界を全て示してある。明らかに，一辺が約105ｍ前後の方格地割が残存していることが確認できる。つまり藤田元治が指摘した新羅九州五小京の「方一町」に近い規格が，溟州治所においても確認される。それが東西方向には最低８坊から最大12坊，南北方向には４坊または６坊が認められる。つまり最大で東西方向：南北方向が２：１の比率の長方形である。ただ端に行くほど遺存地割は曖昧になったり，長さや方角にずれが生じたりしているので，正確な条坊の範囲と一辺の長さは判別しがたい。特に北壁の西半分周辺では方格地割がかなり乱れているが，これはその区域を貫通する水路の氾濫などによる攪乱および，周囲に比べ高い微地形の影響によるものと考えられる。そのため本稿では性急に全体の条坊数を断定し，復原図を示すことは避けたい。ただ図上復原からは東西10坊，南北６坊が最も現実的であることのみ指摘しておく。この場合，江陵邑城の部分は方格地割のなされた領域を外れる。これは，前節で述べたようにそこに官衙が立地していたためと考えられる。

なお，山田は日本統治期の都市計画による可能性も残しているが，官報などを参照しても日韓併合後すぐの時期までに近代的な区画整理が行われた記録はなく，その可能性はほぼない[47]。したがって地籍原図[48]には近世以前の道路区画がほぼそのまま残されているとみて良いだろう。

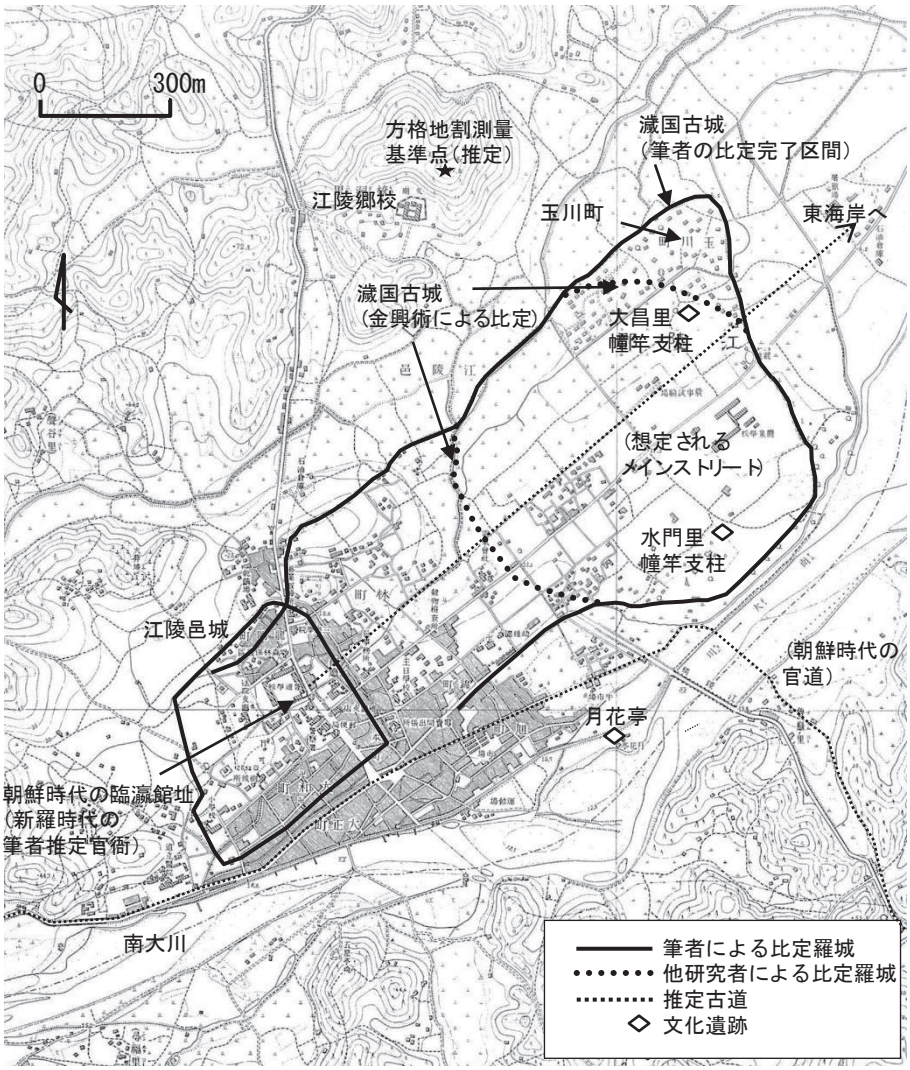

図 6　地籍原図分析を基にした濊国古城及び江陵邑城の羅城比定

1933 年陸地測量部測図の 1 万分の 1 地形図「江陵」に加筆して作成。1933 年の状況を基準とし，それ以前に存在したものは「址」の字を加えた。

方格地割の向きは南北軸から左方向に約 48° 傾いており，それは江陵邑城や濊国古城の城壁の方向とほぼ一致する。このことから，羅城と方格地割は無関係に造成されたものではなく，少なくとも一方が他方を意識して計画されたものと考えられる。また羅城の北壁には歪みはあるものの基本的に直線で，方格地割と平行である。一方，南壁の東半分と東壁は外側に大きく湾曲しており，方格地割との整合性が確認できない。湾曲部の内側には明らかに方格地割の痕跡が認められない領域が存在し，何らかの理由でそこまでを羅城で包んだのであろう。考えられる理由は二つある。一つ目は寺院の存在である。東壁の湾曲部には大昌里幢竿支柱[49] が，南壁のそれには水門里幢竿支柱が現存し，両方とも統

一新羅時代のものである。両方とも北東～南西方向を向いており，方格地割の方向とほぼ一致する（図５，図７）。

幢竿支柱は通常寺院の前方に一か所または二か所並んで設置されるが，濊国古城内の二か所の幢竿支柱はその位置関係から，対をなしているとは考え難い。つまり，それぞれの位置に別々の寺院が存在したと解釈できる。これは寺院が都城内や近隣に立地した統一新羅時代において[50]，濊国古城内が都市域として機能し，また方格地割が当時も有効であったことを示す。同時に双方とも羅城内でかつ方格地割がなされていない場所に立地していることは，羅城の不自然な湾曲が，寺院を城内に含めるための措置であった可能性が考えられる。この説を取る場合，羅城の造営は寺院建立の後，したがって方格地割を伴う都市計画がなされた後か，少なくとも同時施工ということになる。

二つ目は河川との関係である。濊国古城の南側には，南大川が日本海に向かって東流している。1915年測量の５万分の１地形図をみると，東壁の南半分は実際の河道と隣接しており，北半分も旧河道と思われる円弧状の砂地に隣接し，この砂地の下流側には三日月湖も存在する（図１参照）。したがって東壁の曲線は，南大川の当時の流路に合わせたものである可能性が高い。南壁も同様で，地形図で旧河道などは確認できないものの，等高線や現地観察により測定できる微地形から，や

図７　大昌里幢竿支柱（上）と水門里幢竿支柱（下）

新羅時代の方格地割画に沿って区画整理された街区と方向がほぼ一致することがわかる（2013年８月筆者撮影）。

はり旧河道に沿って築城されたものと判断できる。

さらに南壁の西半分では，方格地割の一部を若干浸食するような形で羅城の遺存地割が存在する。方格地割の一部が河川の攻撃斜面に立地したため浸食を受けたか，あるいは平安京と桂川の関係のように河川流路との部分重複を承知で方格地割を計画した上で，現実の河岸沿いに築城した結果と考えられる。このことからも，濊国古城が方格地割の施工に先だって築城されたのではないことが斟酌される。

以上から，まず方格地割が施され，その後に防衛機能を強化するため，地割の一部または全部を取り囲む形で羅城が築造された可能性が高いと考える。もちろん図５をみると羅城の外側にもある程度方格地割と同じ方向を持つ筆界が見えるので，方格地割が羅城内に限定されない可能性も残る。それが本稿において，方格地割の条坊数の断定を避ける理由の一つにもなっている。しかし万一そうであった場合でも，羅城を跨ぐような形で方格地割を施す際に，中に取り残された羅城を残すことは考えづらいので，いずれにせよ羅城は方格地割に先立つことはないであろう。むしろ平安京の遺構街路上にも築造された御土居の如く，先に存在した方格地割の領域を，羅城の築城によって，現実の都市空間や地形に合致する形で再構成させたとみるべきであろう。

やや蛇足であるが，朝鮮時代や日本統治期の行政境界は，南壁と西壁を除いてはほぼ羅城を境界としている。羅城が都市の内外を分かつという認識が，住民の間にも長く定着していたものと思われる。

先行研究では，濊国古城の築城時期を絞り込めずにいた。それは羅城または地割のどちらか一方のみを取り扱ったために，両者の相関関係から時期を推定するという手続きが踏めなかったからである。第Ⅰ章でみたように，方格地割は九州五小京の比定地に多く確認されている。方格地割が新羅の州治または小京の造営に伴うものであるとすると，方格地割の後に造られた濊国古城の羅城も，実は濊国の時代ではなく，新羅の江陵地域支配確立後の出現ということになる 。いずれにせよ，濊国古城は条坊と羅城を兼ね備えた都市プランを持つ，高度な計画都市であった。

Ⅳ．濊国古城の性格と溟州治所

(1) 濊国古城の立地と築城時期

日本の宮都（または都城）のほとんどや大宰府がそうであるように、東アジアにおける古代の計画都市は，南向きが正面と考えがちである。朝鮮においても，高句麗の平壌や百済の泗沘，新羅の王京を始めとして，地方都市でも南原京や尚州は，東西・南北方向に方格街路が形成されている。しかし日本の国府の街路が道路や条里に沿って向きが定められた事例があるように，九州五小京のその他の都市，例えば武州（光州），朔州（春川），北原京（原州）などは街路が南北方向ではなく，軸が傾いている。前節でみたように，溟州治所も大きく傾いている。その場合，都市の「向き」はどのようになるのか。

先述のように，濊国古城では羅城内に残る二か所の幢竿支柱の向き[51]が一致することから，北東か南西かどちらかが正面であった可能性が高い。西原京など他の古代都城の内外に立地する幢竿支柱の向き，即ち寺院の向きも都市の「正面」と平行を示し，直角である事例は多くないからだ。ここでは都市が北東向きであっても南西向きであっても，北東～南西に向かった筋にメインストリートがあったことになる。丁度北西辺～南東辺にかけて，４坊である場合は５筋，６坊である場合は７筋の街路が想定される。いずれの場合も，中央の通りをメインストリートと仮定できよう（図６参照）。これは朝鮮時代の江陵邑城東門外の街路[52]からは，ひと筋北側の

街路になり，地籍原図の段階ではかなりの区間で道路が消滅している。

このメインストリートを南西側に真っ直ぐ延長すると，臨瀛館など朝鮮時代の官衙のあった場所に繋がる。ここが前章で推定したように新羅時代からの官衙だったとすると，その正門からメインストリートが延びたことになる[53]。つまり官衙自体北東を向いていたことになる。官衙と反対側の北東方向の延長線は，真っ直ぐ延ばせば東海岸（日本海）に到達するが，実際には羅城を出るとすぐに，前項で旧河道と想定した場所にぶつかる。

新羅の首都王京と溟州治所の間には，海岸線沿いに幹線道路の存在が想定されているが[54]，海岸線は砂浜と崖，険しい峠道の連続であったため，ことに駅路の開通前には貨客ともに海路が多用された。新羅に駅制が整備されたのは，487（炤知麻立干９）年のこととみられている[55]。江陵と王京の間で陸上交通路が整備されたのは少なくともこの後であろうから，それ以前は海路による首都との交通を行っていたと思われる。新羅時代の駅路の線形や経路はまだ研究が進んでいないが，近世までの街道の険しい起伏を勘案したとき，特に貨物交通には甚だ不十分であったと思われ[56]，溟州の交通結節点は海であったと考えられる。

そのため城郭・住居・古墳など溟州地域の新羅関連遺跡も，次節で言及するように初期は江門洞や松亭洞など，海岸線近くで確認され（図１），時代が下るにしたがって濊国古城のある内陸平野部で見られるようになった。これは新羅の侵攻経路と王都との交通経路が，海岸を窓口として始まったことを示している。その時代は海側が「正面」であったのであり，少なくとも太白山脈方向に繋がる山側が「正面」であった時期は存在しないと考えられるので，南西か北東かどちらかが正面であるならば，北東である可能性が高いであろう。

留意すべきは，駅制が整備された後は，陸路で王京から溟州治所に向かう記録が出てくることである。『三国遺事』には聖徳王代（702-737）に河西州太守として赴任した純貞公が水路夫人らとともに，東海岸沿いの峻険な陸路を北上する様子が描写されており[57]，遅くとも８世紀には陸路が公務旅行手段の選択肢として認識されていたのであろう。

駅路の具体的な経路や溟州治所との接続方式については先行研究がなく，別途調査がなされなければならない。しかし北東の海岸方向に駅路が向かったとは，海駅でない限り考え難い。すると朝鮮時代の関東大路の如く，新羅の駅路も溟州治所～安仁駅～火飛嶺～羽溪と，谷筋が使える若干内陸寄りの経路をとるのが自然と思われる[58]。その溟州治所との接続は羅城の南壁と考えられるが，それが正確にどの地点であったかは，発掘調査を通じた南門の位置比定を待たねばなるまい。

いずれにせよ，都市が東西方向を主軸としている以上，この駅路は主軸の「横」から接続するわけで，都市は「陸路」より「海路」との連結に重きをおいて造られていることになる。このことから濊国古城の方格街路の成立時期は，駅路が江陵に到達した時期より先立っていたか，その後少なくとも陸路より海路が交通の主役であった時代のものであると考えられる。具体的なことは，487年に整備されたという新羅の駅路が，実際に江陵に至ったのはいつなのかが，明らかにされなければならない。

(2) 溟州治所の立地と変遷

第Ⅰ章で説明したように，先行研究では溟州治所の立地について，江門洞土城説・濊国古城説・溟州城説・江陵邑城と諸説がある。李相洙のように時系列に沿った移動説もある[59]が，彼の論文は濊国古城が濊国によって造られたことを前提としている。ここでは，濊国古城が新羅統治下の築造であるとい

う前章での検証結果を踏まえて，李の時系列移動説を再検証したい。

前提として，濊国古城が他の九州五小京の多くとプランの相似性が認められる方格状の計画都市である以上，それらの都市の造営時期と大きく離れていないことが考えられる（表２）。つまり北小京（639年）または河西州（658年）が設置されたタイミングが，時期的にも動機的にも最も可能性が高いと思われる。靺鞨族の侵攻によって北小京を廃止し，州を再び設置した経緯を考えると，方格地割の施工は北小京の設置に伴うものであると考

表２　新羅九州五小京名称と立地の変遷

所在地の現在名	最終名に至る推移	最終名（757）
忠清北道 忠州市	高句麗領→新羅国原小京（557）	中原京
全羅北道 南原市	唐帯方州領→新羅南原小京（685）→南原京（757）	南原京
忠清北道 清州市	百済領→新羅西原小京（685）	西原京
慶尚南道 金海市	金官伽耶国都→（532年新羅が占領）→金官小京（680）	金海京
江原道 原州市	高句麗領→（551年新羅が占領）→北原小京（678）	北原京
江原道 江陵市	悉直国→新羅悉直州（三陟/505）→何瑟羅州（512） →比烈忽州（安辺/556）→達忽州（高城，568）→北小京（639）→河西州（658）	溟州
江原道 春川市	百済領→新羅牛首州（637）→比烈忽州（668）→首若州（673）	朔州
ソウル市 松坡区	高句麗領→新羅新州（553）→漢山州（557）→南川州（利川/568）→漢山州（604）	漢州
忠清南道 公州市	唐熊津都護府→新羅所夫里州（扶余/671）→熊川州（681）	熊州
全羅北道 全州市	百済領→新羅完山州（685）	全州
全羅南道 光州市	百済領→新羅発羅州（年代不詳）→武珍州（685）	武州
慶尚北道 尚州市	沙伐国→新羅上州（525）→甘文州（開寧/557）→一善州（善山/685）→沙伐州（687）	尚州
慶尚南道 晋州市	百済領（665）→新羅菁州（685）	康州
慶尚南道 梁山市	新羅歃羅郡→歃良州（665）	良州

『三国史記』新羅本記及び雑志による。

注）カッコ内の数字は西暦（都市名の成立年），地名は現在地以外の場所に移動した場合に限りその現在名を記した。新羅時代における治所移動を比較する目的なので，新羅占領前の推移は割愛した。最終名は景徳王が757年に漢化政策の一環として，全国の地名を一斉に改称したときのもので，基本的にその地名が新羅末まで使用された。

えられる。小京の設置は占領地において軍事的な脅威が薄まり，内政を充実させる段階に来た地域に対して行われたので，防衛機能を重視した山城ではなく，方格地割を伴った平地上の立地が可能であった。小京には王京の貴族も移住させ，文化・経済的な活性化も図られた[60]。

それがまた，北方民族の南下によって短期間で北小京を放棄する理由ともなった。前章で羅城が方格地割より後の時期に追設された可能性が高いことについて指摘したが，それはまさに北小京から河西州治に都市の地位を変更した時，言い換えれば州治という軍事拠点への転換により，羅城の建設が迫られたとは考えられないか。同じ時期に軍事施設である河西停が併設されたことは，溟州治所の軍事拠点化傾向をはっきり示すものである。それを断定するには城壁跡の発掘調査を待たねばならないが，方格地割と羅城の造成時期の前後関係から，その可能性が高いと筆者は考える。

一方の江門洞土城は前述のように近年の発掘により，5世紀末から6世紀初めの築城と考えられるようになった。土城のある江門洞などの東海岸砂丘地帯には，4世紀以降の新羅式の住居跡や古墳群及び出土品などが認められ[61]，新羅が何瑟羅に足がかりを作った奈勿尼師今の在位期間以後における，新羅人の居住地域及び軍事拠点であったと考えられる。その場合，第Ⅱ章で紹介した「高句麗の辺将が悉直原で狩猟をしていた時，何瑟羅城主の三直（人名）が彼を殺害する事件が起こった（450年）」という『三国史記』の記録に出てくる「何瑟羅城」も，江門洞土城に比定されよう。高句麗との勢力が拮抗する時期だったため，海路に直結する陸繋島に拠点が立地したのであろう。

また砂丘より内陸側の丘陵地には6世紀半ば以後の新羅系の古墳や住居跡が分布[62]するが，これは新羅が海岸部のみならず，後背地域への支配を強めた時期と考えられる。具体的には，何瑟羅に州治を置き，異斯夫が軍主として赴任した時期やその直後に対応する。この時点ではまだ海岸とその後背地が新羅支配の中心であったが，それらの古墳から貴金属の装飾品などが発掘されることから，支配階層の土着化が進行したものと考えられている[63]。

江陵地区における古墳の造営は6世紀初で途切れるが，それ以前の古墳や住居跡が海岸地区に集中していることを考えると，内陸の濊国古城はそれより後の造営であると考えるのが自然であろう。前述のように羅城と方格地割の計画性と，他の九州五小京との類似性からも，そのように判断される。

溟州山城は現状では地表調査のみ行われ，発掘調査はおろか試掘調査もされていない。ただ地表調査の結果，溟州山城の築造時期は少なくとも金周元が溟州郡王になった時期に遡ることは確実とされ，また出土遺物から6世紀後半～7世紀前半まで遡る可能性も提起された。はっきりしたことは発掘調査を待たねばならないが，少なくとも溟州山城が溟州郡王城として機能していたことは確実とみてよいだろう。城郭内から出土した5点の円瓦当には全て「溟州城」の陽刻があり，同じ場所で出土した本瓦が羅末麗初のものと推定されていることも[64]，それを裏付ける。

また溟州山城は6世紀後半の築城とすると，濊国古城と存在時期が一部重なるので，有事の際の籠城用や，河西停のような軍事地区として使用されていたのであろう。中原京に対する大林山城，朔州に対する鳳儀山城など，九州五小京には平地の都市域と山城がセットになっている場合が多い。

第Ⅱ章で紹介したように，王族であった金周元[65]は元聖王との王位継承争いに敗れ，785（元聖王元）年に自身の荘園がある溟州に身を避けた。翌年元聖王は金周元に「溟州郡王」の称号を下賜し，その後郡王職は世襲さ

れて溟州は中央権力から半ば独立し，金氏一族は地方豪族として君臨した。しかし中央王権が弱まった結果，金氏一族の分派，さらに渤海など北方勢力との抗争に晒される時代となったため，平地の濊国古城ではなく溟州山城を拠点としたものと考えられる。河西州が溟州に改名されたのが757年で，金周元の都落ちが785年であるので，溟州の名が使用された期間は，金氏一族による支配開始後の方が長いことになる。そのためこの山城が「溟州城」と認識されたのであろう。もちろん溟州山城に治所があった時期においても，従来の濊国古城の領域が若干離れた「城下町」として機能していたことは十分に考えられよう。

以上を整理すると，溟州における新羅の拠点は，①海岸砂丘地帯，②その後背丘陵地，③濊国古城，④溟州山城と徐々に内陸に移動したことになる。具体的には①は4世紀から5世紀にかけての江陵地域への進出初期，②は6世紀から7世紀初めにかけての支配権確立期に当たると考えられる。③は北小京や河西州（溟州）の設置に象徴される東海岸地域の完全な新羅化，つまり7世紀半ばから8世紀末までの中央統治安定期に該当する。濊国古城の，近隣の他の城郭に比べて広大な平地羅城や，その中の方格地割などの都市プランは，他のどの時期よりも，統治安定期に構築されたと考えるのが最も自然であろう[66]。

そのため筆者は新羅の三国統一前後のこの時期に造成されたとする説を支持する。具体的には，方格地割が北小京の制定に伴って造成され，濊国古城が北小京の河西州への転換に伴い築城されたと判断される。もちろんこの時期にも，他の九州五小京のように緊急時の籠城用としての溟州山城とセットで運用されていた可能性は十分にあろう。④は金氏一族により溟州が半独立国化した豪族割拠期[67]で，周囲との関係が不安定になったため，溟州山城を治所城としたと考えられる。これが8世紀末から新羅滅亡まで続く。

Ⅴ．むすび

本研究は，新羅時代の地方都市の立地と都市プランについて全体的な研究を行うに先立つものと位置付け，現在の江原道江陵市にあたる新羅時代の地方都市・溟州治所を事例として，治所の立地とその変遷について考察し，また部分的に都市の内部プランについても検討を試みた。その結果は以下の通りである。

溟州治所に関連すると考えられる遺跡は，先行研究では江門洞土城，濊国古城，江陵邑城，溟州山城などが指摘されていた。このうち濊国古城に関しては，従来の位置復原が不十分なものであったため，地籍原図を基礎資料として比定作業をやり直した。その結果，従来の見解よりも東西方向に長く，江陵邑城とも繋がる，またはそれを包含する大規模な羅城を持っていたことが判明した。

都市プランとしては，城内には他の九州五小京でも確認された方格地割が明瞭に確認され，寺院も含めた計画都市として造成された事実が確認できた。また羅城は方格地割と同時かその後に，防衛上の目的から追設された可能性が高いことがわかった。都市の向きは官衙を起点に北東方向が想定され，その延長線上にある東海岸を首都との交通結節点として意識した都市計画が行われたと思われる。これは峻嶮な東海岸の地形的特徴から，駅路が本格的に整備される前には，あるいは後においても依然として，海路が主要な交通路であった可能性を表している。

溟州治所の立地変遷に関して，①4～5世紀（征服地進出期）の海岸砂丘地帯[68]，②6世紀～7世紀初頭（支配権確立期）の海岸後背地帯，③7世紀中葉～8世紀末（統治安定期）までの濊国古城期，④8世紀末から新羅滅亡まで（豪族割拠期）の溟州山城期と，時系列とともに海岸から内陸へと移動したと考えられる。このように，新羅の征服地域にお

いては，支配の浸透具合によって，段階を踏んで治所の立地・規模・形態が変化したと考えられる。

今後筆者は溟州治所の研究成果を踏まえ，こうした地方都市の立地変容の原理が，新羅の九州五小京において方格地割の如く共通性がある現象なのか，検証してみたい。そのために，本研究で得た手法と知見を手がかりに，他地域との比較研究を試みる予定である。

最後に，溟州治所の事例研究としての本稿の限界は，文献と地表観察，そして今までに実施された考古学的調査に頼って仮説を提示したに留まることであり，文中で推定した官衙の向きや門の位置，遺跡の年代などは，実際の発掘調査を待って確定されなければならないことである。

幸い，近い将来江門洞土城や濊国古城，溟州山城それぞれの本格的な発掘調査が期待できるので，その成果を待って，本稿で示した見解のさらなる精緻化を期したい。

（立命館アジア太平洋大学）

〔付記〕

本稿の作成にあたっては、関東大学校博物館の李相洙館長を始め、韓国国立春川博物館、江陵市役所等多くの現地関係機関から資史料のご協力を頂き、また筆者の調査に対する様々な助言を頂きました。紙面をお借りして深く感謝の意を表します。なお、本稿は平成25～27年度科学研究費補助金（基盤C：課題番号25370930）の助成を受けて作成致しました。

〔注〕

1）藤田元春『尺度綜考』刀江書院，1929。

2）平壌外城内にあった方格の条坊区画で，箕子朝鮮により造成されたと伝えられているが，現在では楽浪郡や長寿王以降の高句麗時代のものと考えられている（亀田博『日韓古代宮都の研究』学生社，2000，168-169頁）。

3）現在の慶州にあたる，新羅の王都。以下この名称を用いる。

4）統一新羅初期に完成した地方組織で，州は統治・軍事目的で，小京は征服地の文化・社会的な新羅化を目的として設置された。九州五小京に固定されたのは三国統一後であるが，それ以前にも必要に応じて州や小京が設置され，また頻繁に移動や改廃が行われた。

5）藤田亮策「新羅九州五京攷」朝鮮学報５，1953，87-125頁。

6）朴泰祐「統一新羅時代の地方都市に対する研究」百済研究18，1987，49-91頁（韓国語）。

7）山田隆文「新羅九州五小京城郭の構造と実態について　―統一新羅による計画都市の復原研究―」考古学論攷31，2008，13-46頁。

8）新羅の「州」は広域の行政区画名であると同時に，その州都の名でもあった。本稿では混乱を避けるため，前者を溟州，後者を溟州治所と用語を使い分ける。したがって溟州治所と呼ぶ場合，官衙のみを指すわけではない。これは、現在の江原道江陵市に存在した。

9）現在の慶尚北道尚州市。沙伐州とも呼ぶ。

10）李俊善「江陵地域の古代山城」地理学25，1982，15-27頁（韓国語）。

11）洪永鎬「新羅の何瑟羅経営研究」高麗大学校大学院文化財学協同課程考古学専攻博士学位論文，2012，175頁（韓国語）。

12）金興術「江陵邑城の都市史的検討」都市歴史文化３，2005，161-183頁（韓国語）。

13）李相洙「溟州と朔州の治所城―位置比定を中心に―」（特別展連携学術シンポジウム『江原の新羅―文化と歴史』韓国国立春川博物館，2013），53-67頁（韓国語）。

14）江陵市遺跡管理システム（市役所内部システム）に表記されている濊国古城は，金の復原図とほぼ同一で，国鉄江陵駅構内部分のみ若干城壁の経路が異なる。

15）李相洙の前掲13）に対する沈賢容の討論文（同じシンポジウム資料集218頁）で指摘されている。

16）韓国において山脈体系は地質上の概念であり，これとは別に伝統的な山岳の地理的認識体系として，分水界（稜線）の連続である「山経」が存在する。山経では嶺東と嶺西を分かつ分水界は「白頭大幹」及び「洛東正脈」のそれぞれ一部区間である。

17）『後漢書』東夷伝濊条，『三国志』魏志東夷伝濊条。また高句麗と同族であるとも自称している。

18）『三国史記』新羅本紀第三　奈勿尼師今42年条（井上秀雄訳注『三国史記１』東洋文庫，1980），72頁。

19）沈賢容「考古資料で見た新羅の江陵地域進出とルート」大丘史学94，2008，5-6頁（韓国語）。

20）現在の江原道三陟市。

21）『三国史記』新羅本紀第四　智証麻立干６年条（前掲18）96頁）。軍主とは軍事統率者を兼ねた州の長官のこと。

22）『三国史記』新羅本紀第四　智証麻立干13年条（前掲18）98頁）。

23）悉直と何瑟羅（現江陵市）は40kmほどしか離れておらず，双方に同時に州が置かれて軍主が派遣されたとは考えにくい。よって，異斯夫の任地は高句麗などの北方民族との勢力関係により，移動した性格のものと推測される。

24）『三国史記』新羅本紀第五　善徳王８年条（前掲18）136頁）。

25）『三国史記』新羅本紀第五　太祖武烈王５年条（前掲18）154頁）。

26）『三国史記』新羅本紀第九　景徳王16年条（前掲18）299頁）。

27）『三国遺事』巻二　紀異元聖大王条（古典研究室訳『新編三国遺事』新書院），1994，136-140頁。

28）金昌謙「新羅溟州郡王考」成大史林12－13合併号，1998，41-56頁（韓国語）。

29）『新増東国輿地勝覧』巻四十四　江原道江陵大都護府条（韓国学文献研究所編『全国地理志②』亜細亜文化社，1983），805頁。 溟州の名は1955年に江陵郡中心地が江陵市として独立した時に，残る郡部の名称として復活し，1995年に再び両市郡が統合江陵市として合併されるまで存続した。

30）関野貞らによる朝鮮古跡調査の第６回として江陵郡が含まれ，濊国古城や客舎などが調査された。

31）関東大学校博物館・江陵市『江陵溟州山城―地表調査報告書―』関東大学校博物館学術叢書43，2009，59頁。

32）現代重工業・国立考古学研究所「江陵鏡浦台現代ホテル新築敷地内遺跡」2013（現地説明会用パンフレット。報告書は未刊行）。

33）前掲11）49-103頁。

34）前掲12）161-183頁。

35）前掲13）53-67頁。

36）朝鮮総督府編『朝鮮古跡図譜（三）』朝鮮総督府，1920，309頁。

37）朝鮮において地籍図が登場するのは1911年より1917年まで，朝鮮総督府臨時土地調査局が行った土地調査事業で作成されたものが最初である。本稿ではこれを後の地籍図と区別して「地籍原図」と呼ぶ。

38）金興術論文の濊国古城復原図はほぼ3,484尺に相当するので，金はこれを全周と考え，それに羅城の範囲をあてはめた可能性もある。

39）地名の面から検証すると，金や李の復原図における濊国古城に含まれない林塘洞に「土城」の集落名があったことも，このことを裏付ける。土城集落は玉川洞と江陵邑城の間にある。

40）もう一か所，龍岡町62番地の南に隣接する城地目（図５中の記号「B」）は，図上においても現地景観においても城というより傾斜地であり，形状からしてももう一か所（同43番地北側）と連続するとは考え難い。そのため図６では濊国古城の比定線に含めていない。

41）江原文化財研究所・江陵市「江陵邑城」江原文化財研究所学術叢書57，2006，82-88頁。なお，この報告書に掲載されている江陵邑城の復原図も実際と少なからぬずれがあるので，図６は地籍原図をもとに，筆者が改めて図上復原を行ったものである。

42）『新増東国輿地勝覧』巻四十四　江原道江陵大都護府条（韓国学文献研究所編『全国地

理志②』亜細亜文化社，1983)，813頁。

43)『大東地志』によれば，平海邑城は高麗末の倭寇襲来を契機に築造され，清河邑城も高麗末，寧海邑城は辛禑10 (1383) 年，迎日邑城は恭讓王２(1390) 年と，高麗末に新築または改築された。このような周辺邑治の状況から，倭寇の侵攻が重なった高麗末期に江陵邑城が築造されたとする推定は，一定の説得力があろう。

44) 朝鮮時代における江陵の客舎（公務旅行者の接待及び王の祭祀のための施設)。

45) 江原文化財研究所・江陵市「江陵官衙址」江原文化財研究所学術叢書36，2005，127-130頁（韓国語)。

46) 統一新羅の五小京には金官（海）京，中原京，北原京，西原京，南原京があり，方角名としては「東原京」のみ存在しなかった。

47) ただし図中に示したように東海岸を縦貫する国道の改修が行われ，また地籍原図には一部の道路が拡張された痕跡（「道」地目の拡幅）が見られるなど，全く手が加わらなかったわけではない。

48) 当該地域の地籍原図が作成されたのは大正５(1916) 年である。

49) 法会などの告知用に寺院の入り口に立てる旗（幢竿）を支えるための柱。統一新羅時代を起源とする。風水地理説の解釈に利用されることもある。

50) 例えば王京内の皇龍寺や西原京の龍頭寺址（鉄幢竿が現存）などで，城郭内に寺院が確認されている。

51) 幢竿支柱は幢竿を左右から挟んで支えるので，左右一対の支柱同士を結んだ線の直角方向が「正面」となる。ただ前後どちらの直角方向なのかは，はっきり区別できない。

52) この街路は濊国古城の東壁外へも直線で続いているが，想定される方格地割の南よりに偏っている点，直線区間が旧河道と考えられる点，道路の行き先が江門洞ではなく南項津（南大川の河口）であることから，現時点では古代道路とは考えられない。

53) 筆者は方格地割の測量基準点となる高地の推定を試みたが，遺存地割の延長線上に位置する高地は江陵郷校の北側にある標高67.8m地点が唯一である（図６)。

54)『三国史記』雑志第六　地理四　有名未詳地（井上秀雄訳注『三国史記３』東洋文庫，1980)，250頁。所謂新羅の五通において，東海岸を北上する路線は東海通とする見解と，北海通とする見解に分かれており，一致をみていない。この問題については別稿にて論じる予定であるので，ここでは立ち入らない。

55)『三国史記』新羅本紀第三　炤知麻立干６年条（前掲18）85頁)。

56) 轟博志「大東地志に現れた東南至東海三大路（関東大路）の経路比定」文化歴史地理14-1，2002，96-98頁（韓国語)。朝鮮時代の関東大路のうち，王京から溟州治所への駅路区間と重複する江陵～平海間においても，11箇所の峠が連続し，事実上徒歩交通以外は用をなさなかった。

57)『三国遺事』巻二　紀異水路夫人条（前掲27）129-131頁)。このエピソードは水路夫人を主人公とした竜宮説話がメインテーマで，フィクションの要素が大きいと思われるが，純貞公は実在の人物と見られている。

58) 前掲56）95-96頁。

59) 前掲13）66-67頁。

60) 李仁哲「新羅中古期の地方統治体系」韓国学報56，1989，46-53頁（韓国語)。

61) 前掲32)

62) 前掲15)，218頁。

63)『増修臨瀛誌』は，溟州古址を江門洞土城の内陸側にある潟湖である鏡浦付近とする，地元の言い伝え（諺伝）を記している。

64) 前掲31）114-115頁。

65) 金周元は江陵金氏の宗祖であり，溟州山城の推定南門外に一族が1942年に建立した「溟州郡王古都紀念碑」が残っている。

66) 新羅真平王代（在位579～632）のものと伝わる蓮花夫人の説話の舞台が濊国古城南壁外の南大川河川敷にある月花亭（図６）であり，蓮花夫人の家の庭にある池端に建てられたとされることから，これが事実に基づくものなら，北小京造営前より濊国古城周辺に新羅人の集落があり，貴族が居住していたことになる。南大川対岸の魯岩洞に

蓮花の家があったという説もあるので，現状では参考程度にしかならない。

67）元聖王の一代前，宣徳王（780年即位）以降の時代を新羅下代といい，中央の親族政治や，溟州のような地方の半独立化などにより，新羅が国力を失い滅亡に向かった時期とされる。三国時代の新羅を上代，三国統一を成し遂げた金春秋（武烈王）の即位（654年）以降を中代という。したがって本文中の①②の時期は上代，③は中代，④は下代といった分け方もできよう。

68）①の時期はより巨視的に見ると，溟州治所より王京に近い悉直（三陟）が中心であった時代と言うこともできる。

Reconsidering the Changes of Location and Town Planning of the Capital of Myeongju Province under Shilla Rule

TODOROKI Hiroshi

The aim of this study was to take the first step in examining the changes in location of the Shilla Dynasty's major cities known as the "9 States and 5 Distant Capitals." It approaches the project through a case study on Myeongju, located today in Gangneung City, Gangwon Province, South Korea.

The first stage in the project was to determine the shape of Yeguk Goseong Town Wall, which is believed to be the product of Yeguk, a small state that occupied the East Coast region of the Korean Peninsula before its occupation by Shilla. The shape of the wall was reconstructed using land registration maps. While earlier researchers had undertaken a similar project, their righting figure appeared to have a fundamental error showing Yeguk Goseong Town Wall with a much broader territory that almost included Gangneung Eupseong Town Wall, constructed during the Goryeo Dynasty. Thus, this project undertook a re-evaluation of the data.

Next the study attempted to determine the town plan of the inside of Yeguk Goseong Town Wall. Extant grid land subdivision information came from land registration maps and 1:10,000 topographical maps, which also showed most of Shilla's local cities such as Muju (Gwangju), Sangju, Namwon, and Gangju (Jinju). From the province's central office, the main street was determined to have faced northeast toward the eastern seashore where it could connect with Shilla's capital (Wanggyeong) via the sea route. Part of Yeguk Goseong Town Wall, then, was not straight but curved to include at least two temple sites outside of the grid blocks. Thus, Yeguk Goseong Town Wall seems to have been constructed after the completion of the grid-shaped town plan.

Then, the change in location of the town of Myeongju was examined. In the 4th to 5th centuries, it was located at the eastern seashore, likely near the Gangmun Dong Fortress. It was moved inward, to an area like Chodang Dong from the 6th to mid-7th century. It moved again to the Yeguk Goseong area after the distant capital of Buksogyeong was established in the mid-7th century, and the town wall was later constructed to reinforce its defenses against northern threats such as the Goguryo or Mohe (Malgal). The Myeongju Mountain Fortress was also constructed in this period for emergency defense, after which it came to be considered the main provincial seat, particularly following the escape of the Kim Juwon royal family from Wanggyeong, who became the rulers of Myeongju, until the end of the Shilla era.

Thus, Myeongju's center moved from the coastal area to the inner valley gradually, as Shilla's reign become more and more concrete. It seems that such a pattern of movement may have meant to unify Shilla's regional centers (Ju Chi) and distant capitals (So Gyeong). Finally, the aim of this project is apply the results of this case study to its wider hypothesis, and prove how common this phenomenon was during the period.

Key words: Shilla Dynasty, Gangneung City, Myeongju provincial capital, Yeguk Goseong Town Wall, Grid land subdivision.